

植	物	
防	疫	
講	座	

虫害編-5

ヒメトビウンカの発生生態と防除

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 ひら え まさ ひろ
中央農業研究センター 平 江 雅 宏

はじめに

ヒメトビウンカ *Laodelphax striatellus* (Fallén) (カメムシ目: ウンカ科) は、日本全土を含むアジアに分布する。成虫の体長(翅端まで)は、長翅型の雌は約 4 mm, 雄は約 3.5 mm, 短翅型の雌は約 2.5 mm, 雄は約 2.3 mm である(図-1)。本種はイネ、コムギ、ヒエ、アワ、トウモロコシ、スーダングラス、ブロームグラス、クサヨシ、イタリアンライグラス、オーチャードグラス、フェスク類等多くのイネ科植物を吸汁加害する(梅谷・岡田編, 2003)。イネでは、本種の吸汁による直接的な被害よりも、イネ縞葉枯ウイルス(*Rice stripe virus*, RSV)によって引き起こされるイネ縞葉枯病や、イネ黒すじ萎縮ウイルス(*Rice black streaked dwarf virus*, RBSDV)によって引き起こされるイネ黒すじ萎縮病による被害のほ

うが重要視される。このうち、イネ縞葉枯ウイルスは永続的かつ高率に経卵伝染する媒介様式であり、ウイルスを獲得し伝染能力を持った媒介虫(保毒虫)は、死亡するまでウイルスを媒介し続けるだけでなく、次世代以降も高率な経卵伝染により媒介能力を持ち続ける。このため、いったんイネ縞葉枯病が流行に入ると早期の終息は難しく、過去2回の流行時においても流行開始から終息までに10年以上の時間を要している(図-2)(柴, 2016)。近年、関東、近畿、九州地方の一部の地域でイネ縞葉枯病の発生面積が増大していることから(図-2)、今後の発生推移に注意を要する。

I ヒメトビウンカの発生生態と ウイルスの伝染環

ヒメトビウンカは休眠性を持ち、寒冷地や降雪地帯で



図-1 ヒメトビウンカ

左: 左より雌成虫, 雄成虫, 短翅型雌成虫.
右: 越冬幼虫.

Ecology and Management of Small Brown Planthopper, *Laodelphax striatellus*. By Masahiro HIRAE

(キーワード: 水稻害虫, ヒメトビウンカ, 発生生態, 発生予察, 管理法)